

岩漿とはマグマのこと

岩漿文学会代表 馬場駿

文学とか創作とか、そういうものに突き動かされる内なるマグマを見失ったとき、会員諸氏の自分の中の「岩漿」は、終焉を迎えるものなのかも知れない。自分が陥った「シンドローム」の余波の中で、しみじみとそう思った。書きたい長編が短編に、短編が小説とも言えない「創作」にと変わる。さらには載せたい作品を丸ごと削る真の理由が、その時点での「高額な」ページ割負担金からのエスケープだと自認したときに。思い起こせば、過去何人かの書き手が、「生活」と「趣味」を天秤に掛け、生活を採ったわけも同様だと推測できる。

趣味ならば物心両面での余裕が要る。心だけの余裕では創ることは出来ても、ページ割負担金という散財が、言い換えれば現実の「生活」が発表の邪魔をするのだ。そんな心配は要らない、皆がそれを支えるから、と切り切れるだけの財力が会には無い。またあったとしても「ほかの人に迷惑をかけてまで」と考える作者は多かろう。趣味である以上、気遣いが伴うからだ。

本論から少しく外れた。私事だが、代表をつとめて十三年余が過ぎた。物心両面の余裕の無さから言うのだが、私はすでに「経年劣化」していて、とてものこと会員の皆さんの「会の拡大戦略を」という高いご期待に添えない。仕事に追われ、執筆どころかホームページを更新する余力も残っていないというのが現状で、また、正直な告白だ。もうそろそろ許して欲しい。若くて、余裕があって、将来を見据えて会の運営を図れる方に、「代表」を引き継ぎたい。会のあり方から見ても、作品を創って、それを出す出さないを、お小遣いの有無で決めているような人に「代表」を預けてはいけぬ。

そこで、次回十九号を最後に代表・編集長の座を降りたいと思う。足し引きの無い現実の中の現実、本音中の本音だ。書いておいて出せるならそのときだけ参加する、そんな「一会員」、それが今の私に最も似合った立ち位置だと思っている。私なりに精一杯運営してきたつもりだが、会員のご指摘通り、会と誌を「拡大再生産」できなかったことは否めない事実だ。とくに小説の書き手乃至小説の数は減少の一途を辿り、ついに十八号は二名、二作品になった。その内の一名、一作品が代表の私なのだ。あえて付け加えるならば、執筆会員のボルテージの低下もある。いまなら安心して「代表」という高い舞台から降りられるのだ。今号もまた十一月現在で、一作品も寄せられてきていない。少し前に「去年は十月に『マグマ』で檄を飛ばしている。今年も何かするべきだ」との叱咤激励を頂いた。

然し毎回作品提出の「督促」が要る、このことが既に、私だけではなく会員各位の「執筆マグマ」の冷却・鎮静化を物語ってはいないか。毎回原稿が積極的に集まって来ていれば、この文のような「想い」すら出て来ないかもしれない。少なくとも表明はし難いに違いない。

暗い話はこのあたりで止めて、新しいリーダーと、その拡大戦略に、二十号からの『新・岩漿』に夢を繋ぎ、期待をしたいと思う。老兵は去るのみ、という言葉もある。すぐに十九号から担当したいという方が代表になられたら、それはまた望外の喜びで、希望として述べた退任時機は、通常の引継ぎを念頭に置いたにすぎない。

いま私は、質・量ともに最も充実していると評価している「岩漿十号」を見つめながら、独り缶チューハイを舐めている。

2010年11月6日記す

※ 追伸的に・・・この表明に異論・反論・非難などのある方は、大変恐縮ですが私の勤務先箱根まで来てください。そこには文学とは程遠い毎日の仕事に忙殺されている筆者がいます。本文とも妄言多謝。